

「看護」と「女性研究者支援」の橋渡し

渡井いずみ (東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 特任助教)

仕事の内容とやりがい

大学全体の女性研究者支援事業に関わった後、看護の世界に戻って研究と教育に携わっています。地域看護は、地域や職場・学校など身近な生活の場で人々の健康や暮らしを守るための方法の開発や地域システムを構築すること、その役割を担う保健師の人材育成や能力開発を扱っています。そのためフィールドへのフットワーク、専門職とも住民ともネットワークが築けるコミュニケーション能力、医療や健康に関する知識や経験だけでなく多角的な視点や実践力が問われます。現在の研究室では、東日本大震災の被災地への支援や街の復興に向けた取り組みにも力を入れており、まさに社会に貢献していることが実感できる仕事です。

進路決定のきっかけ

高校生の頃は心理学や社会学にも惹かれましたが、両親が理系進学を希望していたので、当時はまだ珍しかった看護学部にて「未知の世界にチャレンジ」するつもりで進学しました。卒業後に助産師として病院で働き、多くの女性の出産や闘病と向き合ったことで、自分の将来や人生について考えるようになりました。病院内だけでなく地域や職場など生活の場から健康支援することが重要だと考え、保健師に転職。その後、自分が子育てしながら働く立場になった時に、働く母親への健康支援の学問的裏づけが国内にはほとんどないことを知り、そのテーマで研究しようと大学院進学を決めました。

仕事と家庭のバランス

子どもが小さいときは、とにかく体力勝負。夫、職場、両親、保育園ママ仲間など多くの協力を得て乗り切りました。子どもが成長してからも「子どもの学校行事に行けない、研究時間が充分にとれない」など悩みはつきませんが、優先順位をつけて時間を振り分け、あとは「自分なりに精一杯頑張った。」と考えるようにしています。仕事と家庭、どちらかに集中できる人が羨ましいと思うこともありますが、両方にやりがいを持って自分も幸せだと感じています。

進路選択に対してのメッセージ

失敗することや人と違う道に進むことを恐れずに、自分が興味を持てることにぜひチャレンジして下さい。その時々で違う世界に飛び込むときには勇気がいりますが、私自身は「迷ったら前に進む」ことを選択し、それで今まで何とかなってきました。また、すぐに評価されなくても地道に努力すること、様々な年齢や異分野の方とも積極的に交流して多様な考え方や知恵を学び、視野を広げること大切だと思います。

<渡井いずみ(わたいいずみ)プロフィール>

- 1985年 県立千葉高等学校卒業
- 1989年 千葉大学看護学部卒業(看護師・保健師・助産師免許取得)
- 1989年 虎の門病院就職(産婦人科病棟助産師)
- 1992年 富士通株就職(保健師)
- ～結婚、第1子出産(育児休職取得)、第2子出産(育児休職取得)～
- 2003年 東京大学大学院医学系研究科修士課程入学(地域看護学分野)
- 2005年 同博士課程進学
- 2007年 東京大学男女共同参画オフィス 特任助教
- 2011年 現職

